

# 麻疹・風疹ワクチンキャンペーン Supplementary Immunization Activityについて



感染症危機管理専門家(IDES)養成プログラムの海外派遣にてWHO西太平洋地域事務局 Vaccine Preventable Diseases and Immunization 部署に所属

柴田 和香 (しばたわか)

自治医科大学医学部卒業、出身の千葉県にて地域医療に従事後、オランダRoyal Tropical Institute (KIT) にて国際保健修士号取得

私は2023年10月より、厚生労働省の感染症危機管理専門家(Infectious Disease Emergency Specialist, IDES)養成プログラムの一環で、1年間の契約で、マニラにありますWHO西太平洋地域事務局(West Pacific Regional Office, WPRO)にきています。Division of Disease Control (DDC)のVaccine Preventable Diseases and Immunization (VDI)という部署に配属されています。お気付きの通り、WHO内では頭字語が乱用されています。

最初は会話についていくのがなかなか大変で、「これは何の略?」とばかり質問していました。

VDIではワクチン予防可能疾患(ポリオ、麻疹、風疹、B型肝炎、日本脳炎、ジフテリア、百日咳、破傷風、など)の予防接種事業のみではなく、サーベイランスからアウトブレイク対応まで、他部署と協力しながら幅広く感染症対策を行っています。近年は、子宮頸がんのワクチンも多くで導入されていますし、成人対象のワクチンもたくさん発売され

ており、守備範囲はとても広いです。私はポリオやサーベイランスの仕事などに携わってきましたが、今年の2月下旬より麻疹・風疹のワクチンキャンペーン Supplementary Immunization Activity (SIA)のサポートでラオスに派遣されています。

WHOの西太平洋地域は特に多様性に溢れた地域です。中国のような14億人以上の巨大な国もあれば、人口数千人から数万人程度の太平洋に浮かぶ小さな島国もいくつも含まれています。地理的には、内陸国のモンゴルとラオスから、7,000以上の島から成っているフィリピンのような島国、一番小さな大陸のオーストラリアまで、本当に幅が広いです。気候も様々です。私はフィリピンもラオスも初めてでしたので、食や文化、生活の面でも新しい発見が多く、とても楽しく過ごしています。

例えば、ポリオに関してVDIでどのような仕事をしているのか紹介します。野生株のポリオは西太平洋地域からは2000年に排除されています。ですが、世界的には野生株のポリオはまだ撲滅されていないため輸入される可能性はあり、また経口ワクチンを利用している限りはワクチン由来株の発生もありうるので、油断するわけにはいきません。ポリオの代表的な症状は急に起こる麻痺であり、主に子供の病気ですので、各国において、15歳以下で急に麻痺症状を起こした子供がいた場合、直ちに通知され検査や調査が実施できる仕組みが必要です。同時に経口ワクチンから注射ワクチンへの移行も推奨しています。さらに、世界から



写真1 ラオス女性の毎日着る伝統衣装「シン」にて同僚とトレーニングに参加



写真2 村のヘルスセンターにてSIAワクチンキャンペーンに向けて指導している様子



写真3 ラオスのWHO国事務所とピーマイ(ラオス新年)の頃に咲き誇る黄色い花「クーン」

ポリオが撲滅される日に向けて、病院や研究所、ワクチン製造工場などに保管されているポリオの検体の安全な処理について指導しています。私たちは西太平洋地域の各国でのこのような事業の実施運営を技術的にサポートしています。

ワクチン予防可能疾患のサーベイランスに関しても、同様に各国の事業をサポートしています。日本は感染症法などに基づくサーベイランス制度があり、多くの感染症が全数であったり定点把握であったり届け出ることが決まっています。届け出の日数なども細かく決まっています。私はラオスに派遣される前は、太平洋諸島でのサーベイランス制度の強化のためのトレーニングの準備を手伝っていました。太平洋諸島は小さい国が多く、検査ができる検査室が自国に無かったり、保健医療専門職も少なかったり、といった問題を抱えています。その中で、どのように世界基準のサーベイランスを維持するかを考えなければいけません。

現在は、5月に開催予定のSIAの計画・運営のサポートでラオスにきています。SIAとは、定期予防接種率の低い国にて行われる、追加予防接種キャンペーンであり、今回ラオスでは、5月下旬の10日間で全国の9か月から59か月の乳幼児全員に麻疹・風疹ワクチンを接種する

ことが目標です。麻疹は特に感染力の強いウイルスであり、95%以上の予防接種率を保たなければ、蔓延してしまう恐れがある感染症です。ラオスではCOVID-19の影響で、定期予防接種率が低迷してしまい、今回のSIAが必要であると考えられたため、GaviとUNICEFなどから資金援助をいただいています。

ラオスは戸籍制度が確立されていない低所得国であり、村のヘルスセンターではパソコンやインターネット環境が整っていないことがあるため、対象人口の推測や報告制度の効率化などに関しては困難が多いです。また、ここ10年程は経済成長率が減速し、そこにCOVID-19の打撃が加わり、現在は経済状況が芳しくありません。公務員の給与は低く、転職や離職が多く、保健医療従事者も入れ替わりが激しいようです。ラオ人が半数以上を占めているのですが、多くの少数民族も暮らしていて、彼らは公共政策に対して不信感を抱いていることがあります。比較的小さい国であり、独裁政権であるため、中央から末端まで統制がとりやすいという利点はあります。このような状況で行う全国規模のキャンペーンです。

COVID-19中に定期予防接種率が低迷したのはラオスだけでなく、多くの国

で同様のことが起きてしまいました。2023年5月にCOVID-19が「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」であるという宣言が終了され、人の動きが再活発化し、世界的に麻疹の感染が拡大しています。ラオスは中国とベトナム、カンボジア、タイ、ミャンマーと麻疹未排除国に囲まれていて、サーベイランス制度も脆弱であり、リスクの高い国です。今回のSIAで対象人口の最低でも95%以上にワクチンを届けることを目標としています。

WHOに来てから、貴重な経験をたくさんさせていただいています。公衆衛生・国際保健の仕事は学生時代からの憧れでしたが、自治医科大学卒の私は9年間の義務年限がありましたので、ここまでの道のりは長かったです。義務を終えた後に国際保健の仕事に内定したのですが、COVID-19でその仕事は保留となってしまうという挫折も味わいました。今このような仕事ができていることは夢のようで、諦めなくて良かったと思うのと同時に、現在のプログラムによる派遣は1年間だけですので、このような仕事を続けるには、できるだけ多くのことを吸収して、研鑽を積み重ねなければいけないと、毎日身の引き締まる思いで過ごしています。